

原告団

遺族・CO裁
判、災害責任
追及、特集号
第百九十九号

原告団レポート

遺族——
田口シズヨさん

昭和三十八年十一月九日の三川鉾炭鉱爆発の犠牲者の遺族、田口シズヨさん(次正九年三月生れ、六十五歳)の自宅がある。
シズヨさんは、四十七年に思ひきって家を建てた当時は、ほんの数えるほどしか住宅が見えなかったが、このころは家が建てこみ、病院も道路も、という風に急速に進んでいく。
入口のかたわらに、石仏が二体置かれている。家の中の八畳の間には、一間半の仏壇に仏像が所せましと安置されており、一見してお寺の風情である。掲げられた額には、補償律師・田口光昌とあり、これがシズヨさんの僧名である。爆発の二年後に得度して、中山身語正宗から贈られたもの。
仏壇には、宗祖寛惠上人像を中

仏のみちへ

元の軍需工場があった辺り、まだところどころ古い建物も残っている。その一角、荒尾市増永二七三(新生西區十一班の二)に

思いきって



昭和34年11月、一家そろって瀬高の清水寺で。



シズヨさんと聡子ちゃん、そしてより子さん。

この思いは自分だけに

お経に託して祈ることがつとめ

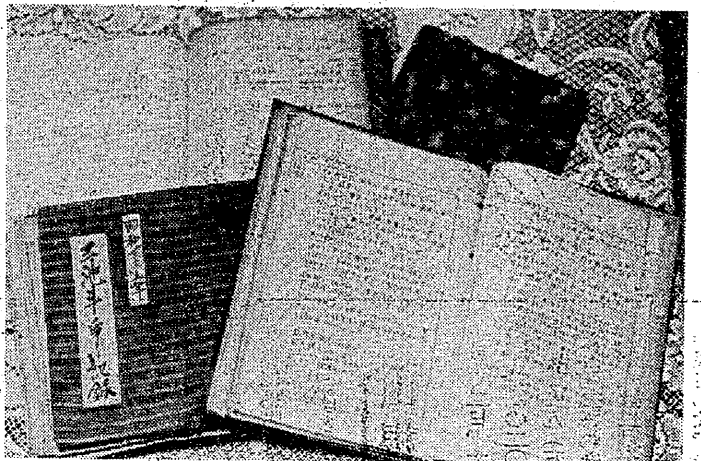
「痛かったろう」と残る悔い

ごく自然に十六年十二月に米吉さんと結婚、小倉で新しい世帯を持った。米吉さんは、十九年に召集で兵役にとられた。わずか二年たらずだったが、激戦の仏印(現在のベトナム)へ。その間、シズヨさんは南関の実家へ帰ったが、日本で最初といわれる小倉のB29による空襲を経験している。
二十一年の夏に米吉さんが復員してきて、一年ぐらゐは農業をしながら、やはり食糧と家に苦勞した。そんな中で、どんなにきつかったか、炭鉱へというところになった。宮浦鉾へ二十三年の入社である。それから三年間というものが南関から大牟田まで、自転車通勤でがんばった。夜の八角目峠を自転車を押しての三交替勤務であった。

まじめ人間
三川鉾へ移った米吉さんは、常一歩の仕組工(開発仕組、途中四カ月ほど採炭に従事)として働く。まじめな性格で、見かけはむしろおとなしい人だった。けれども「意志が固い」というか、こうと思つたらテコでも動かさない」ところがあった。シズヨさんは語る。いゝわゆる、肥後もっさか。しかし、正しいことを貫くのが身上。若くして信仰の道に入り、家でもお参りを欠かさず、水ごりなど仕事の方でも精勤。もっとも生

活は苦しく、「そうでなければ食えなかった」とシズヨさん。几帳面な性格は、人から「万年暦の引き破れ」といわれた位だ。その当時の米吉さんを知る、かつての同僚は、こんな話を聞かせてくれた。
「新しい斧(よき)を持ってきて、先山の古い斧と交換したが、毎朝丹念に研ぎ上げるものだから、しばらくしたら、どちらが古いのが判らなくなった」と。
そのまじめさは、三池闘争の間でも発揮された。前に出たことはなかったが、信念を貫き通したのである。米吉さんは、当時の丹念な日記とともに、三池闘争のたぐさんの資料を整理し、残している。今はその一部しか残っていないのだが――。

日記に託す
三池闘争が終つてからも、日記は続く。
昭和三十五年十二月二日、「前略……職制の第二組合員に対する考え方が変わってきたといふ。全生産再開の前は、言葉は柔らかで態度もいねいだったがどこか大柄になり、歩増(注「出来高給」)も出ししめるようになった。会社とはそんなものだ。安い賃金で、多く働く者を優遇する。わかりきったことだ。現在のところは、第二を優遇して第一の切り崩しに利用しているまでのことだ……後略」
五日、「前略……今ところ歩増や作業上のことは黙っているが、連からずぶつければならぬ時がくる。今からおたがいにメモをとり、記録しておくことが大切だと思つ」
日記は、当時の職場の状況を中心に、組合のこと、池田内閣の政策、メーデー事件、白鳥事件、管生事件、松川事件、そして災害のこと、新聞(天声人語)のメモ、同僚のこと、さまざまにわたる。



米吉さんが丹念につづった日記と三池闘争の記録、配役・歩増控など。なぜかその一部しか残っていない。

誕生日に死

運命の日は、偶然にも米吉さんの誕生日と重なっていた。米吉さんは三十五才の誕生日に、池田内閣の配役され、時刻はすでに昇坑の途中であった。
シズヨさんは、そのころ苦しい家計を支えるために、コンクリート会社の土方に働きに出た。仕事を終え、バスで帰る途中、同じ桂町の永江さんと会う。「なにも知らん」というわけで一緒にバスを降りた。それっきり家には帰れなかったのである。
「まさか父ちゃんが死んではいない」それだけが望みだった。「常一は大丈夫だ」とも聞いた。そして「信仰しているからお不動さんが助けてくれる」と信じていた。
米吉さんは遺体となって翌十日の朝がた発見された。
本社の体育館に設けられた仏壇の真ん前のお櫃にとりすが。悲しみの対面だったのに、不思議に涙は出ない。葬儀が終わるまで涙を見せなかったシズヨさんである。葬儀が終わったとたん、十日余りも寝込んで動かなかった。

棺の中の米吉さんは、日頃のどちらかという。肌黒い顔とは違ひ、赤味を帯びていたのが印象的だった。手を合わせているが針金でくくられていた。「痛かったろう。あの針金をとってやたらよかった」と悔いが残る。
シズヨさんは、北炭夕張の災害について「またか」という思いです。この思いは自分たちだけで終りにしてほしいと――。
また裁判について「おそいですがね。せめてみんなが生きているうちに」と、やりきれない気持ちを訴えるのである。